

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	国語力を育てる言語活動（2012年）
Author(s)	浜本, 純逸
Citation	国語教育思想研究 , 27 : 73 - 79
Issue Date	2022-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053350
Right	
Relation	



いきなりですが、「言葉遊び」から始めましょう。

ノートかメモ用紙の空いている端に、あいうえおの五十音図を書いてください。・・・・・・次に、その中の、タテ・ヨコ・ナナメの二つの文字をつないで言葉を見つけてください。「三分間で一番多く見つけた人に、鉛筆一本を賞品として差し上げます(笑)」。

アイウエオ	愛 上 息 秋
カキクケコ	柿 菊 赤 菊
サシスセソ	キス 寿司
～ ～	

坂、浮く、など、三分間で二音の言葉をいくつ見つけましたか。

小学校二年生であれば、片仮名で書くのもよいでしょう。五年生くらいであれば漢字で書かせるのもよいでしょう。

音が組み合わさって「ことば」ができていること、音が文字で表されていること、音と文字の関係、文字が組み合わさって言葉ができていること、

「五十音図の中に言葉がいっぱいあるなあ」と気づき、「ことばっておもしろいなあ」と感じる瞬間が生まれれば幸いです。

大学の講義の導入に、このような「言葉学習への入門」をしていました。

さて、本日は、「国語力を育てる言語活動の充実」ということを次の七点からお話いたします。

はじめに(国語学力と言語活動)

- 一 学校教育法と思考力・判断力・表現力
- 二 言語活動の充実を通して
- 三 言語活動の領域について

四 学習の手立て(作業)

五 指導案の目標と書き方

六 判断力を育てる学習指導

七 メタ言語を教えるという自覚

八 ソーシャル・メディア

はじめに(国語学力と言語活動)

一九五〇年前後の経験主義教育は「はいまわる単元学習」と言われ、経験主義では学力が育たないと否定されました。その後、先生が教える伝達型の授業がおこなわれてきました。ところが一九八〇年頃から、「学びの主体は子どもであり、子ども中心に学習指導をしよう」という流れが生まれてきました。子どもが主体的に言語活動を通して学ぶ学習指導が求められるようになりました。しかし、「言語活動あって学力なし」と指摘されるのが大方の現状です。「国語学力が育っていない」と言われるのです。

生活科や総合学習などの実践を通して活動させるやり方は分かってきたが、「言語活動と国語学力との関係がよく分からない」という課題が浮かび上がってきました。そもそも「国語学力」とは何か、その構造はどうなっているのか、「国語学力」を育てるということはどういうことかを考えなければならなくなりました。それらのことが分からないと、どういう言語活動を通してどのような国語学力を育てるのかということが不分明なのです。どの学年のどの時期にどの教材を通してどのように「国語学力」育てるのか、という課題が私達の面前にあります。

一 学校教育法と思考力・判断力・表現力

学校教育法(第三〇条第二項)は、「学力」を次のように規定しています。

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これら

を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに特に意を用いなければならない。

人生八〇歳を超えても学習する、いわゆる生涯学習社会では、新しい情報があふれ新しく言語メディアが更新される状況になっていく。そこでは基礎的な知識及び技能を活用して課題を解決していく、思考力・判断力・表現力が大事だというわけです。

指導要領は、だいたい一〇年きざみで変わっていきますが、長いスパンで普遍的な国語教育を考えると、学校教育法を参観しておくことは重要であろうと思っています。

OECD の PISA 二〇〇〇年調査では、書かれたテキストだけではなく、図表などを含めて情報を取り出し、解釈、熟考・評価することが求められ、テキストの対象が広がりました。さらに2009年では、「読みへの取り組み」(動機づけ、楽しむ、所在の探索、テキストの選択)が加わった。これは、情報の入手の仕方や積極的に取り組もうとする意欲、つまり新しく情報の対象の接近の仕方、いろいろなインデックスの読み方や利用の仕方などもリテラシーに入れようということになっています。しかし、PISA の「操作主義的学力観」では深いところからの思考力・判断力は養えません。

「操作」を支える価値観(教養・コンモンセンス)に培う教育が必要になっています。これからは、操作的学力を含み込んだ思考力・判断力・表現力を育てるとともにそれを支える教養・コンモンセンスに培うことが必要でしょう。

二 言語活動の充実を通して

釧路の先生方が作られた「釧路プラン」にも考えられておりますけれども、言語活動の充実のポイントとして二点あげます。

- ① 言語活動を通して知識技能を身につけさせ、それらを生かして「思考・判断・表現」する必要のある学習プロセスを設定する。
- ② 言語活動(単元)と小刻みに思考力・判断力・表現力を育成する学習とを一体化していくスモールステップ(単位時間の指導目標)を設定する。

思考・判断・表現をする必要ある学習プロセスが、言語活動の場にあります。そこでは、九カ年の見通し、小学校一年の一学期から中学校三年三学期まで、どう見通していくかを考えることが「学力」の構造化にあたって必要ですし、一学期ごとの育てた学力、さらには一単位時間の授業でどういう「学力」を育てるかということを考えることが必要になります。

現在、次のような指導目標を見ることが多い。

本時の目標 〇〇校区の紹介番組の作成を通して、思考力・表現力を育てる

これでは、目標が漠然としていて、結局は、活動はあっても「育てたい学力」は育たないのではなからうか。

思考力・判断力・表現力の概念を明らかにしながら、小分けして行って、極端に言えば、学力(思考力・判断力・表現力)のどの要素を、九年間の一時間ごとに育てるか、見極めていきたい。その上で、思考力・判断力・表現力を育てるカリキュラムをあらためて作っていきたい。

「小学校学習指導要領解説 総則編」には、次のように示しています。

知識・技能を習得するのも、これらを活用し課題を解決するために思考し、判断し、表現するのもすべて言語によって行われるものであり、これらの学習活動の基盤となるのは、言語に関する能力である。

いわゆる国語科基礎教科説であり、道具教科説です。指導要領では、各教科の言語活動例を例示しています。

国語……説明、記録、報告、詩・短歌・俳句・物語・随筆などを書いたり、編集したりする
社会……観察や調査、体験の言語による表現
算数……言葉、数、式、図を用いて考え、説明する
理科……科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりする

体育……チームの特徴に応じた作戦を立てたりする

私達に必要なことは、思考力・判断力・表現力の概念とその要素を明らかにし、それを小分けし、子度達の発達の実態に即した九年間のカリキュラムを作っていくことではないでしょうか。

三 言語活動の領域について

カリキュラムを作るためには、言語活動の領域を定めなければならない。私は、今次のような六領域を構想している。が、言語、「聞く話す」「読む」「書く」「言語について考える」に「見る」及び「思考(内的言語活動)」とを加えた六領域を考えています。

- ① 見ること
- ② 聞く・話すこと
- ③ 読むこと考
- ④ 書くこと力
- ⑤ 言葉について考える
- ⑥ 思考力

① 1番目に「見ること(ビジュアルリテラシー)」を置くべきだと考えています。挿し絵を見てお話の内容を想像する、動画をみて考える、まんがを読む、写真を読むという活動も入れます。

絵をみて物語を作ろうというのはメディアリテラシーの学習です。テレビやビデオのマスコミに対する批判的思考力を育てることも内容です。

直観力や像的思考力を育てることも関わってきます。テレビやビデオの映像とも関わってきます。また、ソーシャルメディアとして「集合知」の形成媒体として位置づけていくのも「見ること」の学習内容となります。

④ 「ことばについて考える」という領域を国語科の一領域としたいと考えています。一九九八(平成10)年版までの『学習指導要領』では、「言語事項」となっていて、二〇〇八(平成20)年の『学習指導要領』では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」と改められた領域である。文字・漢字・語彙・語句・語種・文法・文章論・言葉と記号・古典の言葉などが含まれておりいいかにも据わり悪い領域名である。これらに「メタ言語

学習」を加えて、「言葉について考える」領域とするのである。

⑥ 思考力領域

国語科教育に、もうひとつ「思考力 thinking」を領域として、位置づけたと考えています。

「思考 thinking」を、まず「像的思考(形象的思考・文学的思考)」と「論理的思考」に小分けして考えます。像的思考は、比喻・描写・人物像・視点人物・事件などです。論理的思考は、比べる・分ける・推論・構造などです。この両者を組み込んで考えていくといいと考えています。「思考力(thinking)」について、梅棹忠夫さんたちの編集した『日本語大辞典』(講談社)には、「ある結論を得るまでの観念の過程」と定義しています。そうすると思考には、論理によって解決する過程とイメージによって解決する過程があると言えることができるでしょう。そして、この二つの思考過程以前に「ひらめき」とか「直観」とかといわれるもの、つまりパースの言う「アブダクション」を位置づけることができるでしょう。そこで、これからは、「思考の型」を

「アブダクション」

「像的思考」

「論理的思考」

の三つの型に分けて構造化したいと思っています。

論理的な順序思考の一例として、公園のトイレの落書きを挙げてみましょう。前を見ると「右を見よ」と書いてある。右を向くと「左を見よ」と書いてある。左を見ると「キョロキョロするな」と書いてありました。これは空間の順序ですね。空間の秩序を見いだすと線条化できます。文章に書くのは三次元の空間を2次元の線状にしていることです。対象の時間と空間の見つけ方、概念を表す言葉などを、学年を考慮しつつ身につけさせたいと思っています。

横浜国立大学の高木まさき先生達は、このようなメタ言語学習の用語や思考力の要素を配列したカリキュラム『横浜版学習指導要領国語科編』を作成しています。

ぜひ、「釧路プラン」をプランに終わらせず、カリキュラムにまでもって行ってもらいたい。

さて、横浜版を見ますと、新たに付けたい学力ということで、「ごんぎつね」では、「話者」と「作者」とは違うんだということはっきりと4年で教えるというんですね。兵十と新美南吉は違うんだというあたりをきちっと読み取らせようということです。文章構造、構成図を教えようとしている。そういう用語を教えるということになっている。「プロットを立てて」書くというのもあります。

四 学習の手立て(作業)

学習指導案では、学習活動を通して〇〇する力を育てると書きます。

学習活動にはどのようなものがあるかということについて、一九五〇年代の単元学習批判の後も、「活動を通してでない」と学力が身につかない」とこだわって研究した静岡の望月恒三さんのグループの研究を次に、紹介します。今から五〇年前にこんなことを考えていた人達がいたということです。

「文章の読みに重要な部分に線を引かせるような方法をとる。それも、ここがだいじだから線を引けというような子どもを受動的にする方法ではなく、人物の気持ちのわかるところを探して、そこに線を引けとか、人物が話したと思うことばを書き入れよ、というように、その仕事をするために、どの子どもも、どうしても自発的に文章を読まなくてはならないような工夫をする」と述べています。(『現代教育 6』 岩波書店 一九六一、二〇五～二〇六)

そして、「読みの作業」として、十四項目を提案しました。

題づけ

わくつけ(紙芝居をつくるために文章をわけてみよう)

表づくり

図示(図に書いて考えよう)

線ひき(考えや感じに赤線を、事実に青線をひいてみよう)

比較(それぞれの場面の「泣く」はみんな同じような「泣く」か比べる)

吹き出し

つづきがき

補説する

質問に答えて書く

演出(動作化)

討論

感想文

感想発表会

(大槻明三「主体読み」『日本文学』一九六三、七一～七二)

『ないた赤おに』を読んで、比べると「泣く」にもいろいろあるんだと気づくわけです。指導の手立てとしての「これらの言語活動にどのような思考力が働いているか」と析出していくのは研究者の仕事でしょう。

「言語活動を通して」ということを考えるとき、さまざまな言語活動を学年別に見いださなければなりません。これからの言語活動を考えるとき、先人の実践的研究の方法と成果に学び、継承していきたい。

五 指導案の目標と書き方

指導案の目標の書き方をみると、「〇〇の活動を通して〇〇をする力(国語の学力)を育てる」と書いてありますが、だいたい後半部分があいまいになっています。

例えば、「演劇を通して」というところは書いてあるが、どういう力をつけるのか見ると、「思考力・判断力・表現力」を育てるとある。「九年間でやることを一時間でやるのですか。」と思わず反問したくなります。いう状態になっている。

「思考力・判断力・表現力」を小分けしなければなりません。するとよいでしょう。

例えば、児童の側には「恐竜図鑑を作ろう」「演劇をしよう」、「紙芝居をしよう」、「ペープサート劇をしよう」「ビーバー博士になろう」というように活動を促す学習目標を掲げるのでよいのです。教師のねらいは、国語学力を育てることです。「場面分けをする力を育てる」、「事例から意見を導く方法に気づかせる」などが指導のねらいです。うなぎ博士やビーバー博士を育てるのがねらいではありません。教師のねらいは「国語学力」です。

「恐竜図鑑作り」を通して三冊の本の中から紹介したい恐竜を選ぶ、絵を描くためにどのような環境に住んでいたか読みとる、二〇〇字のキャプションを書くなど、編集過程で選択・判断する力を育てる。あるいは、根拠を挙げて説明する力を育てる、などが教師のねらいです。このような「ねらい」を達成するために「図鑑づくり」などの活動を選ぶのです。「ねらい」によってはパネルディスカッションやポスターセッションが選ばれることもあるでしょう。

一単位時間の育てたい国語学力を明確にしておくために、まずは単元で育てたい学力を明らかにし、次いで小分けしてスモールステップを設定し、反復して活用する場を織り込んでいきたい。そのためには「思考力・判断力・表現力」の諸要素を系統化しておきたい。

次は、私の構想する国語科教育課程例(第五学年)「ピクトグラムと言葉」と「劇をしよう」です。「言語活動・手立て」と「思考力」について取り立ててみました。

劇をしよう (国語科総合)	ピクトグラムと言葉	単元
		目標
場面わけ シナリオ書き 運営委員会 編集会議 役割読み	図鑑づくり おもしろ 字源辞典 紹介する 学習計画を 立てる キャプションつけ 図 示する 引用する 線引き	言語 活動 ・ 手 立 て
同化・異化 選択・観点 分析・総合 共創(集合知) 批評	たとえ・似ている 対比・類比 視点 推論(帰納・演繹) 関係づけ 構造化	思考 力

		評 価 法
--	--	-------------

ピクトグラムというのは「絵ことば」です。非常口に走っていく人が描いた絵など、駅や病院など人の集まる場所にあります。それとことばについて考えるわけですが、考える材料としては非常によいと思います。ピクトグラムは、「ユニバーサルデザイン」としても使われていて、外国人に使いやすいように、冷蔵庫やスイッチの入れ方などにも使われています。共通の考え方、人類的な共通のコミュニケーション手段として考えようというものです。

これは、つけ加えですが、昨日参加させていただいた本学の教室で、佐野比呂己先生が引用の仕方について説明していました。

直接引用の時は、「……………」と漱石は言っている、というように「」をつけて引用する。二、三行引用するときと半ページあまりの長文を引用するときは、ブロック引用といって、「つまり」を使って「つまり、……………」と要約して引用するといいいね。

と巧みに指導されていました。このように言語活動の「実の場」で指導すると身につきます。引用も「表現力」の一つです。教師があらかじめ指導事項を持っていて、「ここぞと言う時」に指導するのは教師の力量だと思いました。

言語活動を通して「思考力」を育てるというねらいを持っていると、単元の中での指導事項がかなり明確に意識されます。活動させながら、必要だと思ったら、比較し、分け、分類して、名づける作業をさせる。そして、何が重要であるか価値判断させる。これからの学力としてこのような力を育てておくと、社会人になったときに生きる学力となります。

単元	目標	言語活動・手 立て	思考力	評 価 法
ピク		図鑑づくり	たとえ・似	

ト グ ラ ム と 言 葉		おもしろ字 源辞典 紹介する 学習計画を 立てる キャプショ ンつけ 図 示する 引用する 線引き	ている 対比・類比 視点 推論（帰 納・演繹） 関係づけ 構造化	
劇 を し よ う (国 語 科 総 合)		場面わけ シナリオ書 き 運営委員会 編集会議 役割読み	同化・異化 選択・観点 分析・総合 共創(集合 知) 批評	

六 判断力を育てる学習指導

さて、「思考力・判断力・表現力」といいますが、「判断力」の指導の実践はほとんどなされていません。

そこで、試案ですが、大学レベルで「判断力」を育てるならば、判断する場に立たせる実践を試みたいと思います。

ペシャワールを基地にしてアフガニスタンで用水路を開拓している中村哲医師の仕事を紹介する写真展を、私は昨年鳥取で開きました。その写真展で、山口敦史君に出会いました。今は、「みちのく応援隊」を組織して福島の人たちの支援をしています。彼から送られてきた「みちのく応援隊会報2号」に、次のようなことが書かれていました。

「現在まで、地震と津波の被災の上に原発事故が重なり合うことで、人々が入りにくい被災地に絞って活動を続けて参りました。これらの活動を続けていく中で、多くの人から多大なる応援や支援、アドバイスをいただけたこと感謝しております。その中で、ある友人より頂いた言葉を紹介します。それは、「原発事故に伴って物流の停止、病院の閉鎖等、支援が届きにくい環境が作られることは、逆にいいことではないか。5年後、10年後の彼らのことを考えると物理的圧力によって人をフクシ

マから出させることも必要ではないか」
（「みちのく応援隊会報」二〇一一、一一、一一）

山口君に対して、「君のしている食料や衣料の援助には反対だ」と言っているのです。

先生方だったら、山口君に続けるべきだと言いますか。それとも、放射能の影響を受ける地域の人々にわずかばかりの毛布を送るのはやめろといえますか。実は、判断力を育てるにはこういう場に立たせることが必要だと思います。

山口君たちは、いろいろ議論をした上で、「物理的抑圧によって人々をこの地から排除するのは、あまりにも人権が無視され、被害を被るのは経済的社会的弱者であろう。まずは、そのような環境を恣意的に創り出すのではなく、現地住民の冷静な考慮の末、彼らの判断によってこの地、もしくは新天地で社会的生活がおくることができるよう必要な助けをしていくことが大切ではないか。」と、援助を続けていく決意を述べています。試案では、「判断力」を育てるために最も重要なのは、迂遠すぎるようであるが、判断の基盤となる「教養・コンモンセンス」を育てることであると考えている。段階を踏んで指導するのはなかなかむずかしいと思います。右か左か、AかBか、を選択する規準(スタンダード)を心の中に育てることであろうと思っています。例えば、命の大切さということ子どもたちや私たちが身をもって知ることが大切です。「判断力」をどう育てていくか、今後の課題としていきたい。

七 メタ言語を教えるという自覚

英語教育の関係者から「英語の時間を増やせ」と言われ、「国際社会に通用する日本人になるにはメタ言語能力が必要なのに、国語の先生はメタ言語を教えていないではないか」とよく言われます。異言語と出会わせる英語教育ではそれができるだから英語の時間を増やさなければならないと言うわけです。みなさん、どうお考えでしょうか。しかし、言葉について考えるということは、国語科でも指導しています。あいうえおの五十音図から二音の語を見つけ出すこと、そしてそれを不思議に感じる、どの言葉が好きであるか考えることなどは、「メタ言語学習」です。小学校一年生で「みかん」、「りんご」、「かき」、「くだも

の」の中からひとつだけ違う言葉を見つけるという学習をします。お店屋さんごっこをして「サバを買いに行くには「果物屋さんに行くか、それとも魚屋さんに行くか」を考えさせるのは、「上位語」と「下位語」の学習です。これは一年生からやっています。ところが、「お店屋さんごっこ」がメタ言語の学習であるという自覚は少ないようです。そのために、英語の先生から「メタ言語を教えて国際人を育てる必要がある」と言われるとうなずいてしまうのです。

言葉について考える力を育てることの意味、「メタ言語」を教えることの意味を問い直していきましょう。小学校国語科では、上位語と下位語の概念化、和語と外来語、方言と共通語などメタ言語を教えてきました。私達はメタ言語力を育てているという自覚を持ち、言葉について語る言葉を教えていきたい。

八 ソーシャルメディア

国語科におけるメディアリテラシー教育の歩みを三段階に分けて考えることができるでしょう。

- 1 私たちはメディアに囲まれて生きているという自覚を促す段階
- 2 メディアを批判的に受容する力を育てる段階
- 3 ソーシャルメディア(ケータイ、インターネットのサイト、ツイッター、フェイスブック、動画など)の力に着目し、そのプラス・マイナスについて考える力を育てる段階

「アラブの春」のような大衆行動や今回の東電福島原発の事故後に「マスメディアの時代は終わった?」ということが言われるようになった。これらの出来事の報道においてテレビや新聞を中心とするマスメディアはあまりにも無力であった。一方、ブログやツイッターなどでまちなかの「専門家」や被災者の発信する情報が受信され、組み合わされて『集合知』とも言われる新しい情報が生み出されていった。多くの人々がソーシャルメディアに速くて正確な情報を求めたのである。マスメディアの信頼性は揺らぎ、ソーシャルメディアの情報の重さは従来以上であった。それぞれが情報を選択・発信・補完して生きる新しい情報回路形成力が必要な時代になってきている。

そうになると、私たちは、不確かな、冷静さを欠いた情報の海に生きることにもなる。

ソーシャルメディアは発信者の見えないメディアであり、情報コントロールや衆愚政治的な煽動の危険性と表裏一体である。これからは、豊かな感受性と確かな思考力・判断力・表現力が求められている。

五・六年生からのメディア・リテラシーの教育では、マスメディア時代からソーシャルメディア時代へのメディア機能の変化のプラス・マイナスについて考える単元が必要になってきている。

おわりに

未来の国語教育のあり方を見据え、「釧路プラン」を磨いていって、言語活動を通して豊かな思考力を育てたいと願っています。私もみなさんとともに歩みたいと思います。

編集部注 初出

2012年『国語論集』（北海道教育大学）9号

（「本講演は、北海道教育大学学長裁量経費を活用した『「国語力」向上 HUE プロジェクト』によるものである。釧路国語教育学会共催、研究大会での講演記録。二〇一一年十二月十二日。」と注記にある）